

# 戦争体験

大坪和子さん

昭和19年3月10日、呉の上空にどこからともなく敵の飛行機が低空で親子焼夷弾<sup>(1)</sup>を投下。敵機は編隊を増やし、次から次へと爆弾を投下して行きます。夜ともなれば灯火管制<sup>(2)</sup>になり、外へ灯りが漏れないように豆球を黒い布で囲み、「救急袋」、「防空頭巾」と水筒を肩にかけ、一日中肩から離すことが出来ません。救急袋の中には、焼米<sup>(3)</sup>が一握りと乾パン<sup>(4)</sup>が入っているだけです。当時、私は小学6年生で母にまわりつくだけの子供です。空襲警報が発令になると爆音と共に爆弾が「ヒューン」「バリバリ」「ドン」と落とされ、逃げるのが一生懸命です。怖い恐ろしい毎日でした。昭和20年7月2日未明、敵機B29、80機の編隊により呉は大空襲を受けました。火の手は盛んになり、みるみる火の海となって、火の中を逃げる人、逃げ場を失い逃げまどう人、助けを求める人たちが

## 【呉空襲】

呉地区の空襲は、市街地が炎上した45年7月1～2日を中心に同年3月19日から同7月28日まで計14回あり、呉市史や県警察史などによると犠牲者は軍関係を除いて約2千人とされています。

7月1～2日の空襲では、152機のB29から、16万454発もの焼夷弾を、すりばち状の呉市街地の周辺から中心部へと投下しました。市民は逃げ道を封じられ、防空壕に逃げ込んだ人たちも、猛烈な火災や吹き込む煙にまかれて蒸し焼き状態になり、無残な死をとげました。

この空襲による犠牲者は2,000人以上とも言われ、約337ヘクタールが焼失し、12万5千もの人々が家を失いました。

けて機銃掃射で撃ってきます。人の頭が飛び、手が飛び、「痛い」という声は呻き声<sup>(5)</sup>しか出ない姿で息を引き取る人や、お母ちゃんと泣き叫びうずくまる子供目がけて機銃掃射で撃ってきます。「アッ」、「ウッ」と叫ぶ声が遠く聞こえるだけです。生き地獄の中、悲惨と苦しむ姿はただむごいとしか言いようがありません。悔しいです、情けないです。敵は昼も夜となく撃ってきます。修羅場<sup>(5)</sup>となる中、7月8日には住み慣れた我が家が丸焼になりました。戦火は激しさに激しさを増していきます。敵機が去り、警戒警報が発令になると「小瀬音八<sup>(6)</sup>」さんと言うお父さんが、娘さんの着物を思い出したように取りに帰り、柳行李<sup>(6)</sup>を抱え防空壕の入口まで来た時、どこから飛んできたのか敵の機

銃掃射を受け、息を引き取りました。娘さんの着物の端布<sup>(7)</sup>が左手に引っ付いたままの姿で死んでいった悲しい思い出は、くやしくて子供心に忘れることが出来ません。防空壕<sup>ごう</sup>生活は想像以上のもので、布団も無い土の上にムシロを敷き、食べる物は乾パンを食べながら飢えをしのぎました。雨が降ればみんな雨で身体を拭いていますが、大変なもので死体の匂いがプンプン臭ってきます。きな臭い焼け跡の臭いとともに、涙を流す人たちでただ一人として嫌な顔をする人もなく、お愛想に「無残やなあ。」と言いながら、死体に手を合わせ冥福を祈るだけです。着の身着のまま、私の頭には「シラミ<sup>(8)</sup>」がわきましたが、痒い<sup>かゆ</sup>と思ったことはありません。1ヶ月以上の防空壕<sup>ごう</sup>生活も警戒警報が解除になり、姉と私は我が家に帰り軍港を見た時、病院船<sup>(9)</sup>が艦砲<sup>(10)</sup>攻撃を受け、船体が横に傾きながら沈んでいきます。白衣を着て片足の無い兵隊さんや両足の無い兵隊さんが逃げ場を求めているのが見え、その中に頭全体に包帯を巻いた兵隊さんが大声で叫びながら海の中へ身を投げました。再び空襲警報が発令になり、母は私たちにバケツで水を掛け、母も水をもう一杯かぶり私たちを引きずるように防空壕<sup>ごう</sup>へと入れると、後も振り向かず一目散に帰って行く。母の後を追いつ「お母ちゃん」、<sup>(9)</sup>「お母ちゃん」と泣く私の手を姉が力一杯ひっぱり、2人で泣き抱き合いました。今思うと、あの時の母の気持ちが痛いほどわかります。昭和20年8月15日、天皇陛下自らラジオを通して戦争が終わった放送を聞き、子供心に流れる涙が止まりませんでした。私たち家族は無事再会できましたが、母は私たちを諭すように強い口調で「戦争の犠牲者になり悲しんでいる友の事を決して忘れてはいけません。人の心の痛みの解る人間になるのよ。」と言いながら、私たち2人をきつくきつく抱きしめ、いつまでもいつまでも離れようともせず、姉と私の首筋に熱い母の涙が一すじ二すじと伝わってくるのが解りました。母と子、子と母の強い<sup>きずな</sup>絆の涙でした。二度と味わいたくない戦争の苦しきは、生涯消えることのできない1ページとして、私の中で深く深く閉ざしております。昭和60年1月7日、母は81歳で眠る如く<sup>(11)</sup>霊山へと旅立ちました。私は母の遺影<sup>(12)</sup>を抱いて50年ぶりに呉の地を踏みました。涙はとめどなく流れましたが、昔の面影は跡形もなく、静かな海の上を小舟

が行きかう平和な街並みへと変わっていました。あの戦火の中で傷を受けた夾竹桃は大きく成長して、私を快く迎えてくれました。暑い夏の日に美しいピンクの花を咲かし、私の心を和ませてくれる大好きな花です。今こうして私が幸福な生活が送れる事も、こうして苦しい中で最大に人生を生き抜いた賜物と、感激でいっぱいです。平和の心を祈りながら、幸せへの道を歩み続けてまいります。

- 1 親子焼夷弾...親弾の投下後、時限装置により空中で分解し、中の子弾が広範囲に拡散するしくみの焼夷弾。
- 2 灯火管制...夜間、空襲に備え、灯火を消したり覆ったりして光がもれないようにすること。
- 3 焼米...備蓄用の食料。もみをいって殻を除いたもので、水や湯をかけ、あるいはそのまま食べた。
- 4 乾パン...保存・携帯に便利のように固く焼いたビスケット状の小形のパン。
- 5 修羅場...戦乱や闘争で悲惨をきわめている場所。
- 6 柳行李...小林市雄さんの体験記にある注釈のとおり
- 7 端布...はぎれ。半端な布切れ。
- 8 シラミ...シラミ目の昆虫の総称。吸う口を持ち、人間や家畜の血を吸う害虫。
- 9 病院船...戦時に傷病者や海難者らを収容し、加療しながら輸送する船。
- 10 艦砲攻撃...軍艦から陸上への砲撃。
- 11 霊山へ旅立つ...亡くなること。
- 12 遺影...亡くなった人の写真。
- 13 夾竹桃...インド原産の樹木。夏に紅色の花をつける。

### 【現在の地図（呉市付近）】



### 【呉市の罹災状況(当時)】

